

古民家の今日的意義と役割～農山村での賑わい

2021. 1. 5to

1. はじめに

最近ブームとなっている古民家について、カフェ、セミナー・ゲストハウス、セコンドハウスなどへの利活用が図られている。こうした地域づくりについては、社会と建築のあるべき姿の観点から研究が進んでいる。その一方では、難しい議論よりも感性で楽しむことができれば十分といった認識が一般にはある。もちろん、理屈が身近なものであれば、感性的な側面と相まって古民家活用の効用がより増加することはいうまでもない。

ここでは、身近な理屈が実践とリンクするよう(古さという)歴史の観点から社会における古民家愛好の背景を探ることにして、古民家の今日的意義を明確にし、その役割として古民家の利活用のあり方を描くことにする。なお、富山県内にあるいくつかの古民家について事例考究もする。

2. 問題の所在と検討点

2.1 問題の所在

どの地域においても賑わいを求めて地域活性化が図られており、集落・街やそれらを構成する民家・町家が地域のアイデンティティと位置付けられ、しかもこのアイデンティティが二通りで活かされている。一つは自分らの集落・街落での生活充実であり、今一つは観光資源として多くの方々と共に楽しむことにある。もちろん両者とも地域の確たる存続をめざしている。

2.2 検討点 古民家の意義・役割、保存・利活用に関する検討点は次の通りである。

- ・古さの意義
- ・現代における存続の意味
- ・古民家の価値の一層の定着化

3. 古民家の社会的意義

3.1 現代における多様な人的構成

集住のあり方としては老若男女の構成が当たり前である。しかしながら、現代では社会の効率化を目指すあまり、切れ目のない世代構成がなかなか困難となつて久しい。これにあわせるかのように居住環境も都市における「新しさや若さ」と田舎における「古さや老い」とに概ね分けられてきた。(都市も古さと老いが進行) そうなると、人間の意識もまた変化し、効率化に合うような考えとそうでない考えとが分化してくる。その代表的な分岐点は古さの捉え方にある。

3.2 古さとは何か

建物でいえば「古さ」は木造建築であり、汚い、腐

る、危険(可燃性)といった3Kで捉えられる。また、人間でいえば、古い(老人)という、頑固、時代遅れ、といった捉え方もままある。どうしてそのようなことになるのか。理由は、効率や時流に合わない事物の排除が異質を許さない考え方の同質化と相まった結果であるとみている。

ではなぜ古さが排除対象なのか。さすがに現代社会でも価値ある古さはしっかりと認めており、有形無形の文化財として確かに評価されている。問題は文化財レベルの場合ではなく極一般の場合である。古さにはグレードがあり、価値についても地域、家族、個人にそれぞれ帰着するものでもある。効率社会は、そうした市民レベルや地域レベルの古さを意に介していないかのようである。

3.3 古さの価値と歴史

ではどうするか、何から始めるのか。それには古さの価値とは何かを市民レベルで明確にしておくことが肝要である。そもそも古さとは歴史であり、個人、家族、地域、それぞれが歩み培ってきた「もののふ(物語)」であり、アイデンティティの土壌であり、業績・実績(遺産)である。これがどうして今後に向けて役立つととられるのであろうか。そこには、積極的に役立てようという姿勢の欠落があり、その解消が今まさに求められている。人間でいえば、老若の切れ目ない世代が、姿勢や環境の継承を可能とする。建築でいえば、現代建築と古建築の両方があってこそ、建築及び建築環境が継承され発展していくのである。そのためにも古さが身近になればならないのである。さらにいえば、古さとは持続可能の証でもある。以上、古民家を大事にする理由を述べた。

4. 古民家の市民レベルでの思い

4.1 古民家愛好

古民家が好きとはどういうことか。二つの理由がある。ひとつは、現代の世知辛い世の中では癒される空間がないために、古民家に癒しを求めるのである。今ひとつは、現代の多様性そのものとして古さを受け入れるのである。これは観光の一環としてのいう意味でもある。もちろん、通り一辺倒な観光とは意味が異なることはいうまでもない。

4.2 古民家への関心

古民家に触れる(関わる)ときの心境をみよう。かかる心境とは、今ある現代世界とは全く別次元の世界だからこそ覗いてみようということであり、自分のアイ

デンティティをより一層固めたいために時間や空間的な広がり求めて、異次元に対し興味を掻き立てることもである。特に、アイデンティティについては、その相対化を図るうえで異次元世界は必要ともいえる。

4.3 観光資源としての古民家

古民家は大規模な場合や群をなしている場合には、古い寺社建築と同じように観光資源として大きな役割を果たしている。これに対し普通規模の古民家では、現代建築(環境)の対極として(身近なところに)位置づけられた物珍しさや好奇心が満足させてもくれる。また、観光によってもそのような状況を再認識することもできる。ただし、古民家は小規模とか単体の場合には有効な観光資源にはなりにくい。

5. 古民家の現存状況

どの地域でも古民家と称する建築は数多くあり、今も住んでいる家屋、博物ゾーンや地域のコミュニティにおいて第二の歴史を刻んでいる家屋、など様々である。ここで、県内の主な古民家について展望しよう。なお、古民家とは農村における昔からの居住施設のこととし、建設年代は昭和初期頃までとする。

(1) 集落における古民家群；例として、

- ・合掌づくりからなる五箇山の相倉集落や菅沼集落。

当該地域に散在の家屋を当該地に集積。

- ・南砺上平村の岩瀬家およびその周辺。集積せず、散在状態のまま。

(2) 多くの地域での古民家；

- ・砺波平野の吾妻建ちの散居村。吾妻建ちでない散居村は県東部にもあり。

・集落において新しい住宅と共存する形で古い建築が残っている。

- ・廃村寸前でも古民家のみが健在のところも多い。

(3) 現状のまま単独での古民家；

- ・公的管轄：富山宮尾の内山邸(江戸期)、立山芦峠の教算坊(参拝者宿、江戸期)、他

- ・現在も居住：砺波散居村 N 邸、大山 T 家、上市 M 家、立山 S 家、他

(4) 移築：公園や博物ゾーンへの移築

- ・民族民芸村に町家と共に古民家も移築

(一般古民家と吾妻建ち古民家)

- ・博物館として博物ゾーンや公園に移す。

砺波チュリップ公園の中嶋家(江戸期)、

立山芦峠まんだら遊園の有馬家(江戸期)、

滑川東福寺野公園の岩城家(江戸期)、他

6. 古民家の使われ方

古民家のうち、大規模なものでしつらえのいいものは著名建築として扱われるが、多くは中小規模の無名建築である。

(1) 博物館としての機能：「当時の生活空間におけるに

わか体験」

- ・当該地において；豪農の館として内山邸や、やや小ぶりの浮田家、などは、地域にて存続する古民家であり、これらは博物館として当時の民俗模様を展示している。

- ・公園や博物ゾーンにおいて；小ぶりの古民家を移築して、博物館的機能を持たせている。

立山芦峠まんだら遊園の有馬家や東福寺野公園の岩城家では無人対応のため、閑散としている(ならざるを得ない)。

(2) 訪問客の受け入れ；「訪れる人とおもてなしの人がおりなすコミュニティ」

- ・南砺上平では、岩瀬家のようにご主人が観光客をもてなしている。

- ・上市大岩の山崎家(花の家)ではご主人とスタッフが出迎え、来場者はお家を取り持つ関係をあたかも大家族がたむろするかのように楽しんでいる。

- ・砺波の公園の古民家中嶋家では、地元ボランティアが定期的に呈茶のサービスをして歓迎。そこに会話が始まることもある。

(3) 居住家屋で公開していない場合；「関係づきあいがおりなすコミュニティ」

- ・観光客は受け入れない。お家の方と何らかの関係が成立すれば、お客として訪問が許可され、古民家の空間を住まう方々と共に楽しめる。



写1 大邸宅の古民家

7. 賑わう古民家、事例

7.1 居場所としての古民家、「花の家」

上市町大岩の山の中に「花の家」(山崎家)と呼ばれる古民家がある。築130年以上は経過している。もともとはそこに居住していたご家族が平地に居を移したので、取り壊しの予定であったが、造りが大変立派のために壊すのには忍びないとして保存が決まり、お家の近くにある城ヶ平山へのハイカー用の無料休憩所として一般開放された。その後2012年には、アニメ「おおかみこどもの雨と雪」のヒットで、舞台イメージモデルとなったお家にアニメファンや家族連れが訪問するようになり、今では年間1万人もの来場がある。以下

にお家における交流の特徴を述べておく。

上市町大岩の山の中に「花の家」(山崎家)と呼ばれる古民家がある。築130年以上は経過している。もともとはそこに居住していたご家族が平地に居を移したので、取り壊しの予定であったが、造りが大変立派のために壊すのには忍びないとして保存が決まり、お家の近くにある城ヶ平山へのハイカー用の無料休憩所として一般開放された。その後2012年には、アニメ「おおかみこども雨と雪」のヒットで、舞台イメージモデルとなったお家にアニメファンや家族連れが訪問するようになり、今では年間1万人もの来場がある。以下にお家における交流の特徴を述べておく。

・訪問者はお家のご主人・スタッフとお家の取り持つ縁を楽しんでいる。お茶飲用はもちろんの事、時には皆さんでスイカを食したり、畑仕事をしたり。

・お家では、今でも映画の主人公たちが住んでいるような感覚になることである。お家に鍋や釜はもちろんのこと家財道具はすべて置いてあり、しかも、(多数の来場の)子どもが描いた絵が座敷に飾ってあって、生活感が蘇えっている。

・大方の古民家では博物館的な役割を旨とするので、訪問者は1時間も経過しないうちに見学終了として退出してしまうことが多い。その点、花の家では勝手知ったる我が家の感覚で、居住感漂う雰囲気の中で訪問客自身が身をゆだね、時間を止めて楽しんでいる。なお、お家は近代文明のない当時のまま。自販機なし、携帯電話不通(最近、保安上のため開通)。

・お家の周辺の環境も皆さんのお気に入りであり、子どもは走り回ったりできる。現代では、騒いではいけません、走ってはいけません、等禁止事項ばかりの住みにくさから解放されたのであろうか、子どもはイキイキし、親もまたそのような光景に自然の良さを発見し満喫しているかのようである。

7.2 民族博物ゾーンの古民家群、五箇山菅沼集落

古民家群は大変みごたえがある。集落ではもちろん居住者は観光客相手に土産物や食を提供している。観光客はそうした商業スペースで食と買い物を楽しんでいる。また、集落には五箇山の民俗博物館にて当時の文化をも満喫できるようになっている。

集落では、お客と亭主の会話も聞くことができ、やはり街の中での買い物や飲食とは違って自然環境と共に居住環境の温かさが自然と感ぜられる。お客の方も日常とは違ったそれこそ異次元の世界を堪能している。

7.3 古民家カフェ

2016年から続いているNHK-Eテレの番組「ハルさんの休日」(古民家カフェ巡り)がある。全国の古民



家カフェの魅力伝える番組であり、特にこだわっているように見えるのは、古民家という空間及びその周辺の景のもとでのカフェの楽しみ方である。カフェ愛好家にとっては、リアルではないものの居ながらにして気分を満喫できる。

番組ではなぜ古民家かを必ず問いかけていて、古民家が刻んできた歴史がさりげなく人に語り掛けていることがごく自然に伝わってくる。そのような空間にてお茶を喫することが古民家とその周辺環境の歴史の奥深さと向き合わせてくれるのであろう。時には古民家亭主との会話はもちろんのこと、あたかも空間と会話しているかのように楽しむこともできるのは、古民家ならではの魅力であろう。

7.4 ゲストハウス

古民家をゲストハウスにする例は多いが、そのほとんどは空き家の再利用としてのものである。人が常駐していないので、訪問者は勝手に楽しんでいってね、ということである。これに対して立山町のS邸では、



家族が住んでおり、例え会合という使われ方の場合でも、亭主の存在が目につくようになっており、また会食の場合にはそれに参加することもままある。そこまですなくても思う方がおられるかもしれないが、古民家の良さは亭主と共にあるという理屈で、大いに楽しめる。上市大岩の旅館でも、おかみが夕食時にやってきて会話するのも、空間とおかみが一体だということであり、訪問者はその意味でも古建築の魅力を満喫している。

8. 保存問題

上記では、古民家の発展的行く末を論じたが、現状では楽観もできない厳しい状況にある。保存問題として周知の論に一部意見をそえて述べる。

8.1 保存に向けて

古民家保存に際して大事に扱うことは当然にしても、一番の問題は、修理修復の費用をどう工面するかである。十分な資産余力があれば、それに越したことはないが、大方は費用確保が難しく、外部の資力に頼らざるを得ない。このことを円滑に行うためにとられている方法を以下に記す。

- ・公的団体に寄贈。地方自治体への寄贈。
- ・NPO・社団・財団にして公的にも民間からも支援受け入れ。
- ・文化的価値が高ければ文化財指定を受け公費投入を可能に。
- ・個人寄付に頼る。ただし文化的価値づけが必要。
- ・パトロンに寄贈や売却。

8.2 保存が困難な場合

修理修復が困難な場合、孤軍奮闘が続けられない場合、どうするか。それは現状維持や改善をあきらめて他の手立てを考えることになる。

- ・観光事業者への売却で。一つは当該地にて飲食店や民泊への転身である。今一つは、当該地を離れ、採算ベースが合うような場所への移転である。この種の売却はなかなか難しい。合掌造りのような特徴建物以外はず採算は無理。
- ・建設業者への売却。部材だけの再利用として。新規に古民家風木造建物の建設ニーズがないと成立せず。また単純に材料再利用はコスト高で無理。
- ・古民家の記録(建築的データや民俗データ)をつくり残す。簡単な記録であっても所有者や地域民の記憶にも残れば十分とするのである。また、特徴ある古民家ならば割合詳細な記録は地域における宝として後世への貴重な資料となる。なお、記録完了後には、古民家は取り壊しとなる。

8.3 壊される場合

(1)壊される理由

多くの場合には、建物が存命にもかかわらず、魔の

手によって建物生命を縮めさせられている。どんな場合があるかを述べる

- ・構造的問題にかこつけて。腐朽はもちろんのこと風雨降雪や地震で損傷の可能性が高い場合、修理修復するくらいなら早めに取り壊して、次への展開を図る。
- ・新築のため、同一場所にある古民家を壊す。使い勝手とイメージの悪さのため。
- ・別の便利な場所に新居を構えるため、旧居を取り壊す。
- ・地域再開発や道路建設で用地提供のため、古民家を取り壊す。

(2)取り壊しを容易にする理屈

古いものを大事に使うといった考えは、いまだに熟してはいないとみている。物を大事に扱うにも、ある程度の余裕が必要であり、余裕のない状況では、古いものか新しいものかの二者択一になりがちである。結果はもちろん新しさが優位に立つのである。

こうした背景をどう考えるのか。効率優先、生産市場、経済至上となれば、変え買い需要を増やすことになり、ゆっくりとした安定成長的な考えはない。最近では、モノよりも情報であるといわれていても、生産に関する根本構造は変わっていない。だからこそ、人間性復権として人間まわりのモノについて適正な配慮が必要であることはいまでもない。こうしたことで、モノ愛好、ノスタルジア、癒し、異次元などの多様性が関わってくるものと考えられる。

9. あとがき

古民家がなぜモテモテなのかについて、理屈をつけたく本稿をまとめた。論点は社会的状況を根幹にして「新・旧」および「老・若」の捉え方にありと考えて、「愛好」の背景を分析した。その結果、改めて認識したことを以下に記す；

- (1) 古民家への思いは現代特有の同質からの脱却であり、自然志向に向けた好奇心や多様性による異次元世界への探訪である。
- (2) 古民家への思いは程度の差こそあっても誰にも共通しており、これが理屈抜きで感性的に古民家を楽しみ満喫へとつながっていく。
- (3) 古民家の利活用には、ホスト側とゲスト側のおりなすコミュニティの形成が肝要であり、これが居場所、カフェ、博物館など、それぞれに兼ね備わった活力と賑わいを可能とさせている。

なお、本稿では特別に地域を限定していないが、この地域でも状況は全く同じであり、心意気もまた同じである。今後は、全国津々浦々、こうした活動がもっと活発になり、古さの復権が日常となるよう、尽力したいものである。

A1. 謝辞：古民家運営の関係各位に記して謝意を表します。

A2. 参考文献：歴史を生活感覚で楽しむ、雑想、大山の歴史と民俗、大山歴史民俗研究会会誌、No. 23、2020年3月、pp. 40-45